
桜色の明日

さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜色の明日

【Nコード】

N9455W

【作者名】

さら

【あらすじ】

勉強もスポーツもななくできて、可愛い女の子ともななく付き合ってる、中学3年生の智哉。このままぼんやりと、退屈な毎日を過ごしていくはずだった。夕暮れの踏切で、10歳年上の彼女と出会うまでは……。 「頑張らない」中学生が恋をして、少しずつ大人に近づいていくというお話です。

夕暮れの空に響く踏切の音。

それはどこか物悲しくて……秋から冬へと向かっていく、この季節は特に……。

下りた遮断機の前に立ち、一人でその音を聞いていると、無性になんか恋しくなってしまう。

けどそんなこと、誰かに話したら笑われそうで、僕はその気持ちを胸の奥に閉じ込める。

最近、陽が落ちるのが急激に早くなった。

買い物帰りの人たちはみんな急ぎ足で通り過ぎ、カレーや焼き魚の混じり合ったような匂いが、どこからともなく漂ってくる。

中学校の制服を着た僕は、警報機が鳴り止むのを今日もじっと待っていた。

さっき触れたばかりの、彼女の柔らかな唇の感触を、なんとなく思い出したりしながら……。

線路の向こう側に女の人が見えた。

スーツを着て髪をひとつにまとめた、どこにでもいるようなOL風の人。

いつもだったら僕はそのまま目をそらし、その人の姿は茜色の景色の中へまぎれてしまっただろう。

だけど……僕はそこから目が離せなくなっていた。

僕の目の前を、風と音を立てて快速電車が通り過ぎる。それは一瞬のことなのに、その時の僕にはとても長い時間のように思えた。

遮断機が上がる。

止まっていた時間が動き出すように、車や人も動き出す。僕はその場に突っ立ったまま、あの人の姿を捜す。
いた……。

線路の向こうから、顔を上げてまっすぐ歩いてくるその人は、もう泣いていなかった。

「美優^{みゆう}も、トモとおんなじ高校行きたいなー」

ストラップのいつぱいついたスクールバッグを、意味もなくぶらぶら揺らしながら美優が言う。

「トモ、第一志望どこにした？」

「麻高」

「げっ、マジで？ 美優、絶対無理だしー」

このあたりで二番目に頭のいい学校名を口にしたら、美優は目を丸くして首を振った。

「別に麻高じゃなくてもいいけど？ 美優が行ける学校にしてもいいよ」

「……なんかその言い方、ム力つくわ」
ム力つくって言われてもなあ……本当に高校なんてどこでもいいし。

自慢じゃないけど、僕は勉強しなくても、ある程度勉強ができた。だからこのくらいのレベルの学校なら、そんなに頑張らなくてもたぶん行ける。

ついでに僕はスポーツもできた。部活に入って遅くまで練習してるわけでもないのに、野球もサッカーも適当にできて、体育祭ではいつもリレーの選手だ。

だいたい汗を流して頑張るのって、だるいし、ダサすぎでしょ？

「だからトモのそういうところが、ム力つくの」

美優はわざとらしく、ぷくーっと頬を膨らませる。

「なんにも頑張ってないのに、なんでもできちゃうとこ」

「しょうがないだろ？　できちゃうんだから」

美優が「くやしー」って言いながら、僕の背中をばんばんと叩いた。

美優は僕の三人目の「彼女」だ。

中三になって初めて同じクラスになった時、美優から「付き合って」と言われた。僕はすぐに「いいよ」と答えた。

他に好きな子はいなかったし、美優はなかなか可愛かったから。

それから毎日一緒に帰って、休みの日は二人で遊んで、キスをしてエッチもした。

そうなるのは思ってたより全然簡単で、美優も喜んでたし、なんとなくこんなもんかなって感じだった。

朝起きて、ご飯食べて、学校行って、授業受けて、友達と騒いで、美優とキスして、家に帰って、またご飯食べて寝る……僕の毎日はこちらやって過ぎていく。

今までも、これから、こうやって過ぎていく……はずだった。

僕が「あの女^{ひと}」と出会^ひうまでは……。

家に帰ると、玄関に女物の靴がそろえてあった。

また勇哉の彼女が来てるのか……そんなことを想像しながら靴を脱ぐ。するとリビングから、家族団欒って感じの笑い声が聞こえてきた。

「あら、トモ、お帰りー」

普段より数倍ご機嫌な母さんが、料理をテーブルに並べながら僕に言う。

なんか変だ……。

いつも帰りの遅い父さんが、くつろいでビールなんか飲んでるし、残業で遅いはずの宏哉兄さんも座っていて、その隣には僕を見つめる女の人……。

「トモ、この方、宏哉の『彼女』さんですって！」

僕の耳に勝手に舞い込んでくる母さんの声。でも僕にはそんな声どうでもよかった。

それより……そんなことより……この人は……。

「初めまして。三好小春っていいます」

そう言って、踏切の向こう側で泣いていた女の方は、僕の兄さんの隣でにっこり微笑んだ。

「けど、あのクソ真面目な宏哉に女がいたなんてなー」

買ったばかりのギターをいじりながら、僕の前で勇哉が言う。

ちなみに勇哉は五歳上の二番目の兄。一番上が宏哉、勇哉よりもさらに五歳上。僕たちは男ばかりの三人兄弟だった。

「ちよっと気が強そうだったけどな」

「……そうかな？」

勇哉が僕を見てにやりと笑う。

「それに美人だった」

「ん……まあ」

「宏哉のヤツ、よくあんな美人つかまえたっつーか、よく宏哉なんかと付き合ってくれたよな」

俺のほうがよくぼイケてんのにって、勇哉が付け加える。

勇哉はうぬぼれ屋で態度がデカくて、宏哉のことをちよつと上から見ている。そういうところが僕も似ていて、女優に言わせれば「ム力つく」んだと思うけど。

「俺、あの人に会ったことあるよ」

「え？ 小春ちゃんに？」

勇哉が僕の顔を見る。

「会ったというか……すれ違ったただけなんだけど」

「この近所に住んでるって言ってたからな。会っても不思議はねえか」

勇哉はふつと笑って、どうでもいいように僕から目をそらし、スピーカーの音量を上げた。

タバコ臭い勇哉の部屋に、僕の知らない曲が流れる。

僕はぼんやりそれを聞きながら、あの日のことを思い出す。

夕暮れの街で会ったのは……踏切で一人泣いていたのは……あの小春さんだった。

さっき、小春さんを囲んで夕食を食べた。

母さんは終始「機嫌で「好きな食べ物は何に？」とか「お勤めはどちら？」なんて彼女を質問攻めにしている、僕はうんざりしていた。

頭がよくて、いい大学に入って、いい会社で働いている宏哉は、母さんの自慢の息子だ。

「だけど「モテない」ってことが、唯一母さんの心配の種だったから、初めて彼女を連れてきた息子のことを、喜ぶのは無理もない。でも「彼女」だったら、僕にも勇哉にもいるんだけどな。」

帰り際、宏哉が車のエンジンをかけに外へ出た時、一人になった小春さんに声をかけた。

「あの、えっと……すみません」

小春さんは振り向いて僕を見た。

「ん？ あたし？ 小春でいいよ」

「えっと……じゃあ、小春さん」

「はい？ 何かしら、トモくん」

大人の余裕つて顔つきで、小春さんが僕に笑いかける。

「俺、小春さんに会ったことありますよ」

「え？ あたしに？」

小春さんは少し考えるしぐさをしてから、またにこつと微笑んだ。

「ごめんね？ どこで……会ったかな？」

「いや、覚えてないならいいです」

覚えてるわけないか。「会った」というより「すれ違った」だけなんだから。

「だけど……けどあの時、泣いてたよね？」

「どうして泣いてたの？ 誰に泣かされたの？」

道端で本当に涙を流す人、僕は初めて見たんだ。

宏哉が外から小春さんと呼んだ。

「じゃあ、またね。トモくん」

小春さんが言っただけで玄関から出て行く。僕は黙ってその背中を見送った。

「んっ」

キスした唇を離してから、もう一度チュッて彼女の唇に音を立てる。

美優はちよつと顔を赤くして「トモ、だいすき」って僕に笑う。

「じゃあねっ」

「うん」

短いスカートをひるがえし、帰ろうとした美優が、僕に駆け戻って耳元でささやく。

「テスト終わったらエッチしようね」

ふたつに結んだ髪をぴょこんと揺らして、顔の横で小さく手を振る美優。

僕が手を振り返したら、美優は満足そうな笑顔で走って行った。

エッチしようね……か。

誰もいない公園を出て、住宅の間を歩く。

上手なキスの仕方、エッチの時の避妊の方法も、聞いてもいないのに勇哉が教えてくれた。

だから僕は周りの中学生より、ちよつとだけ上手く女の子を喜ばすことができる。

だけど……だけどそれだけだ。

うさぎみたいにぴょこぴょこ跳ねる美優はかわいいけど、美優じゃなくても僕はいい。

美優が好きかと聞かれても、たぶん僕は答えられない。

少し歩くと踏切の音が聞こえてきた。だけど今日はどこかが違う。

ああ、そうか。空が青いんだ。

テスト一日前の今日は、授業が午前中で終わりだった。

「トモくん？」

ぼーっと通り過ぎる電車を見送っていた僕は、その声に弾かれるようにして振り向いた。

「やっぱりトモくんだ」

自転車に乗ったまま、僕の前でいたずらっぽく微笑む人は、あの小春さんだった。

「もう学校終わったの？」

小春さんが自転車を押しながら、僕の隣を歩いている。

真っ昼間に十歳も年上の綺麗なお姉さんと歩く僕。それはまったく予想外の展開だった。

「テスト前は半日なんです」

「なあんだ。サボったわけじゃないんだ」

そう言って小春さんはあっけらかんと笑う。

なんか、意外と……アレだな。

最初会った時はビシッとしたスーツ姿で、この前うちに来た時は女らしいロングスカートをはいていた。でも今日は、黒いタートルネックのニットにデニムのパンツ。

そしてその格好が、一番この人に似合ってるような気がする。もしかして性格も、勇哉の言うとおりに、さっぱりした人なのかもしれない。

「小春さんこそ、仕事は？」

僕の質問に小春さんはふふんと鼻で笑う。

「あたし仕事辞めちゃったからプーなのよ。ちょっと体調崩してね。この前キミの家に行った時に話したけど？」

そうだったけ？ あの日僕はかなり動揺していて、肝心なことを何ひとつ聞いてなかったことに今気づく。

「えつと、じゃあ今日は何しにうちに？ 宏哉兄さんなら会社のはずだけど？」

「今日はお母さんに会いに。ほら、この前言われたでしょ？ 宏哉がいない時でも、気軽に遊びに来てねって」

だからってその言葉通り、兄さんのいない家に来るかな、フツー？ そう思ったけど、小春さんはにこにこしながら、自転車の前かごに載せてある、お弁当らしき包みを指さしている。

「あつ、でも、トモくんもいるなら、お寿司もう一個買ってくるんだった」

「いや、いいです。俺、お寿司嫌いですから」

「えつ、うそ。こんなに美味しいのに……でも、ヒロとおんなじね」
ヒロとおんなじ……ヒロ……小春さんは宏哉のことをヒロって呼ぶんだ。宏哉の……彼女だもんな。

そんな当たり前のことを考えながら、僕は小春さんと歩く。
遠ざかっていく踏切の音。保育園の園庭で遊ぶ子供たちのはしゃぎ声。

いつもの道を歩いているだけなのに、なんだかいつもと違っていった。

リビングから笑い声が聞こえてくる。

僕は教科書を閉じ、書きかけのプリントをぐしゃっと丸めポケットに突っ込む。

そしてわざとらしく音を立てて階段を下り、母さんたちのいる部屋をのぞいた。

「あ、トモくん、ごめんね？　うるさかった？」

僕の不機嫌そうな顔を見て、そう言ったのは小春さんだった。

「いいのよお。静かにしてたって、どうせこの子は勉強なんかしやしないんだから」

母さんが笑いながら寿司をつまんでいる。

はあ？　それが受験生に言う親のセリフか？　だけどそんなのはもう慣れっこだから、僕は何も反論しない。

母さんが期待してたのは、長男の宏哉だ。

勉強する時は宏哉につきつきりだったこと、まだ小さかった僕でも覚えてる。

そして宏哉は母さんの期待どおりの成績を収め、期待通りの学校へ行き、期待通りの会社に就職した。

次に母さんが期待してたのは、次男の勇哉だ。

だけど勇哉は言うことをきかなかった。

俺は俺のやりたいことをやるとか、口だけはカッコイイことを言っ
て、今はバイトをしながらバンドなんかやってる。世間で言うフ
リターってやつ。

初めのうち、そんな勇哉に口うるさかった母さんも、今はもうあ
きらめているようだ。

そして母さんは、僕には期待するのをやめた。また裏切られて、

ショックを受けるのが嫌なんだろう。

期待通りに育ってくれる息子は、一人いればいいと思ったのかも
しれない。

どっちにしろそんな僕のことを「恵まれてるな」って勇哉は言う。
そうなのかな…… そうなのかもしれないな。

僕は僕の好きなことをやって、好きに生きればいいんだ。
それに文句を言う人は、誰もいない。

やかんでお湯を沸かしてカップラーメンを作る。

母さんのおしゃべりを聞き流しつつ三分間待ってたら、いつの間
にか隣に小春さんが立っていた。

「甘いものは嫌い？」

すつと伸びる小春さんの細い指。その指先と一緒に、皿にのった
一人分のチョコレートケーキが、カップラーメンの横に並ぶ。

「嫌い…… じゃない」

「やっぱり。ヒロとおんなじ」

そう言って小春さんがにこつと微笑む。

なんでも宏哉と同じにされるのは、なんとなくシヤクだけど、僕
はそのチョコレートケーキをありがたく受け取る。

「それ、小春さんの手作りなんだって。お店で売ってるケーキみた
いね」

リビングから聞こえる、母さんのご機嫌な声。

「小春さん、お菓子なんか作れるのねえ。きつといいお嫁さんにな
るわよ」

「そんなことないですよ」

「ねえ、結婚したら同居なんてどうかしら？ むさ苦しい男どもは
追い出すから」

ちよつ…… 結婚とか同居とか、勝手に話進めるなよ。しかも男は
追い出すとか言ってるし。

「子供が生まれたら、私が孫の面倒みてあげるわよ？ 最近は共働

きの夫婦が多いんでしょ？ 私の友達もそうしてるの」

「そう……なんですか」

小春さんが息を吐くようにつぶやいて、軽く笑った。
ほらな、完全に引いてるじゃんか。

「母さん」

「なによ？ トモ」

僕はポケットの中から、ぐしゃぐしゃに丸めたプリントを取り出す。

「志望校書いたら、親の印鑑もらってこいだってさ」

母さんは僕の書いた学校名を見て、あからさまに渋い顔をした。

「あんた……こんな学校しか行けないの？」

そこは美優が行こうとしている学校だった。僕は麻高から三つランクを落として、そこに書き替えた。

別に高校なんてどこでもよかったから。

「いいだろ。早くハンコ押してよ」

「まったくもう。どうして今、こんなもの出すのよ」

ぶつぶつ言いながら立ち上がる母さん。僕はその隙に小春さんにささやいた。

「今のうちに帰っちゃいなよ。あの人の話、まともに聞いてたら夜が明けちゃうよ？」

小春さんは僕の隣でふふつと笑う。

「そうかもね。でも楽しかった」

そして印鑑を捜している母さんの背中に声をかけた。

「すみません。あたし、そろそろ失礼させていただきますね」

「あら、やだ、小春さん。まだゆっくりしていつて？」

「今日はこの後予定があつて。また今度、お邪魔させていただきま
す」

「そう？ 予定があるなら仕方ないけど」

母さんは本当に残念そうにつぶやく。

男ばかりの家庭に女が一人。話し相手が欲しい気持ちもわからない。

だけど本当に宏哉が結婚したら、お嫁さんは苦労するだろうなあ

……。

「それじゃあ……勉強頑張つてね？ トモくん」

小春さんは子供をあやすかのように僕の頭をぼんぽんと叩いて、
にっこり微笑んだ。

「トーマ！」

テスト最終日の朝、廊下で美優に声をかけられた。

「おはよっ」

「おはよ」

「勉強した？」

「してない」

「してないくせに、さりげなくいい点とか取っちゃうんだよねー、トモって」

そう言いながらにこっと笑って、美優はノートの切れ端に書いたような手紙を渡す。

「これ、あとで読んでね？」

そしてぱたぱたと足音を立てながら、僕の前から去って行く。

学校で毎日話すのに、家に帰れば電話もメールもするのに……なぜか女の子はこういうものを渡したがる。

折り紙のように複雑に折りたたまれた手紙を開くと、カラフルなペンで書かれた丸っこい字が並んでいた。

『今日ママがいないの。テスト終わったら美優んち来ない？』

僕はその手紙をくしゃっと丸めてポケットに突っ込む。

何気なく目に映ったのは、窓の外の四角い空。

めんどくさいなと思って思った。

テストをサボって、美優のこととも無視して、このままどこかに行っちゃいたいって思った。

そんなこと……できるはずなのに。

チャイムの音が廊下に響く。今日の一時間目のテストは英語だったか数学だったか……。

一夜漬けで覚えた英単語を思い出しながら、それと一緒に小春さ

んのチョコレートケーキの味も思い出していた。

「トモ……好き」

美優のベッドの上でキスをする。このまま押し倒してやっちゃうのは簡単なこと。

僕は気持ちよくて、美優は喜んで、だったらなんにも迷うことはない。

それなのに……今日の僕はなにかが変だった。

「どこが好きなの？」

「え？」

「だから、俺のどこが好きなの？」

僕から体を離して、美優はきよとした顔をする。

「どこって……顔？　かな？」

「他には？」

「髪型とか、いつもオシャレな服着てるとことか……あつ、あと、キスが上手いところ」

美優は冗談っぽくそう言って笑ったけど、僕は笑えなかった。そんな僕を見て、美優は少し怒ったような口調で言う。

「じゃあ聞くけど。トモは美優のどこが好きなの？」

「俺は……美優を、好きって言ったこと一度もない」

美優の表情が変わった。

当たり前だ。僕は今、美優を怒らせるようなことを言ってるんだから。

「じゃあ……じゃあトモは……美優のこと好きじゃないの？」

「……わかんない」

「わかんないって何？　美優のこと、好きでもないのに付き合ってたの？　好きでもないのにキスしたの？」

「だから……わかんないんだよ」

「バカっ！ サイター！」

美優はそばにあったクッションを僕に投げつけ「マジむかつくわっ！ 出てけっ」って言った。

僕は美優に言われたとおり部屋を出る。

なんであんなこと言ってしまったんだろう……言わなければ今まで通り、美優とは上手くやっていけたのに。

上手く？ 何を上手く？ キスを上手く？ セックスを上手く？
それが何になるというのか？ そんなことして何が残るっていうのか？

何もない。僕の心には何も残らない。

そしてその時、僕はやっとわかった。

僕は——美優のことが、好きではなかったってこと。

ふらふらした頭のまま家に帰ったら、玄関に女物のスニーカーがあった。

リビングから聞こえるのは、今夜もハイテンションな母さんの声。また、来てるんだ……あの人。

僕はリビングをのぞかずに、黙ったまま階段を上る。

「おっ？ トモ、今帰り？」

二階に上がった途端、部屋のドアが乱暴に開き、勇哉とばったり会った。

「テスト終わったんだろ？ 彼女のウチ行ってたんか？」

「まあ……」

「うまくやったんだろうな？」

へらへら笑っている勇哉を無視して、自分の部屋のドアノブをつかむ。

「メシ食わねーのか？」

「勇哉が家でご飯食べるの、めずらしいね？」

「小春ちゃん来てるからな。俺も弟として顔出しとくかな、みたいな？」

いいな……この人はいつも能天気で。

「トモも来いよ。宏哉がにやけるとこ、見てやろうぜ？」

「俺はいい。食欲ないし」

まだ何か言いたそうな勇哉を残し、僕は真っ暗な部屋に入るとベツドの中にもぐりこんだ。

「トモ……トモくん？」

いつの間に眠っていたんだろう。うつすら目を開けたら、暗闇の中に女の人の顔が見えた。

「……なっ？」

「あ、起きた」

弾けるように起き上がった僕の前で、小春さんがにこにこ笑っている。

「どうした？ 彼女にでもフラれた？」

「な、なに言って……」

「勇哉くんが言ってたから」

「勇哉のやつ……勝手なことを……」。

「小春さんにはカンケーないでしょ」

「そうだけど？」

いたずらっぽい笑みを見せながら、小春さんは勝手に僕のベッドに腰かける。

長く伸ばしたストレートの髪から漂うのは、美優とは違うシャンプーの香り。

「せっかくテストが終わったつてのに、暗い中学生だなーって思っ
て」

「ほつといてください。中学生には中学生の悩みがあるんです」

大人のアンタにはわからないだろうけど。

だけど小春さんは変わらぬ調子で、夢見る少女のような表情で言う。

「それでもあたしは、あの頃が一番楽しかったな。戻れるものなら、
中学生のあたしに戻りたい」

薄闇の中で、小春さんの目が僕を見る。

「……今だって、楽しいんでしょ？」

イエスともノーともとれる顔つきで、小春さんは笑う。

「宏哉兄さんと付き合ってて、楽しいんでしょ？」

「うん」

嘘だ。

「じゃあ、なんで泣いてたの？」

僕の言葉に、一瞬小春さんの視線が揺れ動く。

「あの日、踏切のところで……なんで泣いてたの？」

「やだ……見られてた？」

小春さんはそう言って、ぎこちなく微笑む。そしてその後、ちょっと真面目な顔をしてつぶやいた。

「大人には大人の……コドモにはわからない悩みがあるのよ」

ドアの外で声がした。「トモ、大丈夫かあ？」って言いながら、宏哉が部屋に入ってくる。

「食欲ないって……また腹でもこわしたか？」

宏哉は僕の前に、胃腸薬と水の入ったグラスを置いてくれた。

口数は少ないけど、宏哉はさりげなく僕に優しい。

だから僕には、宏哉が「モテない」ってこと、実は信じられないんだ。

「小春。送っていくよ」

「うん。それじゃあね、トモくん」

小春さんが宏哉と部屋を出て行く。

僕は何も言わないまま、二人の並んだ背中を見送っていた。

次の日学校に行くと、周りの僕を見る視線が変わっていた。女子はあからさまに僕を無視して、男子もなぜかみんな、僕と美優が別れたってことを知っていた。

「だって美優から一斉メール来たもん」

小学校からずっと一緒の、ちよつと気が弱い啓介をつかまえ、廊下で問い詰めた。

「『美優はトモと別れましたー』って顔文字つきで。そのあとお前の悪口が永遠と」

「たとえば？」

啓介がちらつと、僕の顔色をうかがってから答える。

「『ちよつとモテるからって調子に乗るな』『トモは女とやることしか考えてない』『マジウザい、死んでくれないかな』」

バカだ。バカだ、あの女は……。

「あ、これ俺が言ったんじゃないからね。美優が言ったんだから」
居心地悪そうに苦笑いをして、啓介が背中を向ける。

「でもひどいよね。これ、クラス中に回ってるよ」

廊下にぼつんと残された僕のことを、ちらちら盗み見してるクラスノやつら。

そんな視線を振り払うように教室に入ったら、ささっと何かが引いていくような気配を感じた。

別にいいよ。こんなの明日になれば、みんなすぐに忘れる。

僕や美優のことをいつまでも騒いでいるほど、クラスのやつらだつて暇じゃないはず。

それに僕は、美優にそれほど恨まれても、文句を言えないことをした。

だけど……それから何日たっても、僕の周りのチクチクした空気は変わらなかったのだ。

自分が完全にクラスで浮いていると感じ始めたのは、美優と別れて一週間後のことだった。

その日も僕は校門をひとりで出た。

美優と帰らなくなってから、僕と一緒に帰ってくれる人は誰もいなかった。

クラスのやつらはあいかわらずよそよそしかったし、啓介に声をかけてもいつものようにへらっと笑うだけ。

別にいいけど。一人じゃ家に帰れない小さな子供じゃないんだし。

美優といつもキスした公園を通りかかる。

茜色に染まった遊具のそばに、僕は人影を見つけて立ち止った。

「美優？」

そこにいたのは美優と……啓介だった。

「あれ、トモじゃん。久しぶりい」

さつき教室で見かけたばかりなのに、美優はそう言って僕に笑う。そしてその隣の啓介は、なんとなく決まり悪そうに、さりげなく僕から目をそらした。

「なに……やってんの？」

声なんかかけなきゃいいのに……無視してそのまま通り過ぎればいいのに……僕はそのセリフを美優に言っていた。

美優はそんな僕を見てほんの少し微笑む。

「トモには言ってなかったよね？ 美優ね、啓介と付き合ってるの」「えっ」

美優が啓介と？ ウソだろ？ ありえない。そんなの絶対ありえ

ない。

そう思った瞬間、僕は啓介の制服を引っ張り、自分のもとへ引きずりよせていた。

「美優と付き合ってるって……お前、マジか？」

啓介は気弱そうに僕をちらつと見て、また目をそらす。

「お前あの時言ったじゃん。ひどいよなって」

「あれは……ウソだよ」

ふっと顔を上げた啓介は、いつものおどおどした表情ではなかった。

「ひどいのは……トモのほうじゃないの？」

「それは……」

「好きでもないなら、最初から付き合ったりするな！」

啓介が僕の手を振り払って体を離す。その向こうで美優が小さく笑っている。

「啓介は……好きなのかよ」

僕の声に振り向く啓介。

「お前は美優のこと……好きなのかよ」

「好きだよ」

啓介が僕に言った。はっきりと、堂々と、僕の目を見て……。

「美優がトモと付き合ってる頃から、俺は美優のことが好きだった」

踏切の音が聞こえる。

空は色を失い、あたりが闇に包まれ始める。

寒かった。もう冬が、すぐそこまで来てるみたいだった。

暗闇の中にちかちかと灯る、警報機の赤い光。それを見ながら、ポケットの中に手をつっこむ。

引っ張り出したのは、ぐしゃぐしゃに丸められたテストの答案。生まれて初めて取った人生最悪の点数は、先生が発表した平均点よりかなり下。

いつもと同じようにしていただけなのに……周りのレベルが上がったんだ。

なんだかんだ言いながらも、みんな受験というものを意識し始めている。

「おーいつ！ トモくんっ」

踏切の向こうから声が聞こえた。

手を振りながらにこやかに駆け寄ってくる、小春さんの姿が見えた。

「もうっ、何度も呼んでるのに、無視するんだもん」

「無視なんかしてません。聞こえなかっただけ」

去って行った美優と啓介の後ろ姿と、答案用紙に書かれた情けない数字が、僕の頭でごちゃまぜになっている。

「またうちに来たの？」

「お母さんとランチに行つてね。帰りにお邪魔したらこんな時間になっちゃって」

「そうですか……じゃあ」

さっさとその場を立ち去ろうとした僕の手を、小春さんがぎゅっとつかんだ。

「ねえ、ちょっと付き合わない？」

「え？」

「スカツとするとこ、連れてってあげる」

僕の前でいたずらっぽく笑う小春さんの髪が、冷たい風に流れるように揺れた。

小学生の頃、父さんと何度か来たことのあるバツティングセンタ―で、小春さんはボールをかつ飛ばしていた。

「スカツとするよ。キミもやったら？」

「俺は……いい」

「相変わらず、しょぼくれた子ねえ、若いのに」

小春さんはため息まじりにそう言うてから、自販機で缶コーヒーとココアを買って、僕の座っているベンチに腰かけた。

「はい。キミはこっち」

目の前に差し出された甘ったるそうなココア。僕だってコーヒーぐらい飲めるのに。

「なんで……こんなことするの？」

小春さんの手からココアを受け取りながら、僕はつぶやく。

「好きな人の弟だからって、ここまですることないでしょ？」

「迷惑だった？」

「迷惑……です」

僕の隣で小春さんがふつと息を吐く。ボールを打つ金属的な音が、耳の奥にやかましく響く。

「……だったら、断ればいいじゃない」

ゆつくりと顔を上げたら、僕の顔をのぞきこんでいる小春さんと目が合った。

「来たくないなら、断ればよかったじゃない」

「でも……そっちが強引に引つ張ってきたんじゃないか」

「ちゃんと断ってくれば、無理やり連れてきたりしないわよ。誘拐犯じゃないんだし」

小春さんはあきれたような表情をしながらも、僕から目をそらそうとはしない。

なんとなく気まずくて、目をそらしたのは僕のほうだ。そんな僕に小春さんが言った。

「キミね。自分の意思つてもんをちゃんと持った方がいいよ？　そうしないと将来、絶対後悔するから」

自分の意思を持て？　将来後悔する？　担任教師みたいなこと言うなよな。

「ま、あたしも、偉そうなこと言えないけどね。トモくんには、恥ずかしいとこ見られてるし」

小春さんがふつと笑って、ベンチから立ち上がる。

女の人にしては高い身長。僕と並ぶとそんなに変わらない。だけどその指先も、腕も、腰も、なにもかもが細くて……。ふわふわした美優とはなんとなく違う、大人の女の人。

「コドモにはわからない悩みって、なに？」

そう言えばまだ、あの日の涙のわけを聞いてなかった。

小春さんは静かに振り向いて、座っている僕を見下ろす。

「この前言ってたじゃん。コドモにはわからない悩みがあるって」

僕の声につこり微笑み、小春さんは答える。

「踏切の音って……なんだか寂しいと思わない？」

「え？」

突然のその言葉に、僕は思わず声を詰まらせる。

僕がいつも胸の奥に忍ばせていた気持ち、今、この人が代弁してくれただけから。

「踏切の音と、保育園で笑う子供たちの声と、どこか幸せそうな夕飯の香りと……そんな中に一人で立ってたら、寂しくて悲しくて情けなくて……」

僕の前で小春さんが、ちょっと照れたように笑う。

「泣きたくもないのに、涙が出ちゃった」

心臓がとくと小さく動く。

あの日の夕焼けの色。いつもと変わらない街の音。生活感の漂う匂い。

僕も同じものを感じていた。なんだかわからないけど、泣きたくなりそうなの……。

「でも……小春さんには宏哉がいるじゃん」

そうだよ。泣きたくなったら何も聞かずに抱きしめてくれる、彼氏がいるじゃん。

宏哉兄さんはそういう人だって、僕が一番知っている。

「そうね……ヒロはいつも優しいから。あの人と一緒にいる人は幸せね」

「だったら結婚しちゃえば？ もう親も公認なんだし、二人ともいい歳なんだし」

なに言ってるんだ、僕は。これじゃ「結婚」だとか「同居」だとか言ってる、母さんと変わらないじゃないか。まったく余計なお世話だ。

僕の言葉に小春さんは微笑む。そしてゆっくりと僕から視線をそらし、遠くを見つめるような瞳でこう言った。

「だけど……あたしはきつと、キミたちの家に歓迎されない」

「は？ なに言ってるの？ うちの母さんなんて、小春さんのことめっちゃ気に入って……」

「でもあたし、子供産めないから」

ぴたっと空気の流れが止まった気がした。

「あたし子宮がないの。だから子供は産めないのよ」

小春さんはそう言って、少し寂しそうに笑う。

子供には子供の悩みがあって、大人には大人の悩みがあって……。やっぱり僕は大人の悩みなんて、これっぽっちもわかってなかったんだ。

我が家に「結婚話」が持ち上がったのは、その日の夜だった。けれど「結婚」って言葉を口にしたのは宏哉じゃなくて、勇哉のほうだったから驚きなんだ。

「え？ 結婚？ 勇哉、あんたいきなり何言ってるの？」

喉が渴いたから何か飲もうと思って冷蔵庫を開けたら、僕の耳に母さんの声が聞こえてきた。

「だからできちゃったんだよ」

「は？ 何が？」

「だから子供！ 子供ができたの！」

何か言いたげに、口をぽかんと開けている母さん。新聞から目を離さないまま、漫画みたいにゴホンと一つ咳払いする父さん。

勇哉はポケットに手をつつこんで、いつもと変わらず俺様の態度で立っていて、宏哉はそんな弟のことを黙って見ていた。

「ちよつと……勇哉、あんた今、何て？」

「ったく、何度も言わせんなよ。俺の彼女に子供ができたから、結婚するって言ってるの」

「結婚するって……あんた簡単に言うけどね。フリーターの分際で、どうやって妻や子供を養っていくつもりなのっ」

「大丈夫だよ。そのへんはちゃんと考えてるから」

「何を考えてるっていうの！ あんたは甘いのよ！ 昔から何もかもが甘いの！」

「あーもう、うるさいっ！ 俺、この家出て勝手にやるから！」

どこかかと音を立てながら、勇哉が階段を上っていく。

「ちよつと待ちなさい！ 勇哉！」

母さんはヒステリックな声を上げていて、父さんはずっと新聞を見たまま、宏哉は一言も口を出さなかった。

「勇哉っ」

僕はそんな勇哉のあとを追いかけて階段を駆け上る。

ふてくされたような顔つきの勇哉が、部屋の前で僕に振り向く。

「ほんとに……出て行くの？」

「ああ」

「ほんとに……結婚するの？」

勇哉はぐしゃぐしゃと赤っぱい髪をかいて、僕の顔を見下ろした。

「トモ。まさかお前まで、俺のこと信用してないわけじゃねえよな？」

信用……してるわけないじゃん。

僕にあんなに「ゴムつけろ」って言ってた人が、彼女妊娠させちゃったんでしょ？

「俺だつてちゃんと、将来のことくらい考えてんだよ」

「バンドでメジャーデビューして食っていこうとか、思っていないよね」

「アホか！俺はそれほど世間知らずじゃねえ！」

勇哉がそう言つて、僕の額にデコピンをする。

「今までずつと考えてたんだ。考えて俺が決めたんだ。だから誰にも文句は言わせない」

そして部屋に入ると、すぐに小さなバッグを肩にかけて出てきた。

「この部屋、宏哉にやるって言つとけ」

「え？」

「出来の悪い息子がいなくなって、出来のいい息子の嫁さんが同居して、お袋にとっては一石二鳥つてやつだろ」

ふふんと鼻で笑つて勇哉が言う。だけど僕には、勇哉が無理してするようにしか見えなかった。

「出来の悪い息子とか……言つなよ」

勇哉が薄く笑ったまま僕を見る。

「俺にとっては……頼りになる兄ちゃんなんだし」

「トモ……お前、いいヤツだなっ！」

大げさにそう言いながら、勇哉は僕の体をわざとらしく抱きしめる。

「ちよつ、やめ……兄弟でキモいつて……」

「大丈夫だよ」

ぎゅーっと抱きしめられながら、僕はその声を聞く。

「大丈夫。トモも、出来の悪い息子なんかじゃないから」

へへっと笑って勇哉が離れた。そしてそのままデカい足音を立てて、階段の下へ降りていく。

「マジで……行っちゃうの？」

下で母さんの怒鳴り声が聞こえたあと、玄関のドアが乱暴に閉まった。

「智哉くんはね、『やればできる子』だと思っんです」

進路面談の日、担任の女性教師は、僕と母さんに向かってそんなことを言った。

『やればできる子』……僕は今まで『やらなくてもできる子』だと、自分のこと思ってた。

「志望校、変えるって言ってたわね？」

「はい」

今さら美優と一緒に高校なんて行けるわけないし。

「そうね、この前のテストはちよつとまずかったけど、二年生の内申はよかったんだし、今からでも頑張れば……」

「相南高校は行けます？」

「えっ……」

僕が口にした、ここら辺ではトップの学校名に、担任は言葉を詰まらせ、母さんはあきれた顔で僕を見た。

「どうせなら、トップ目指した方がいいと思って」

「あんたは無理に決まってるでしょ！あの学校入るのに、宏哉がどれだけ勉強したか……」

横から口出しする母さんを見無視して言う。

「先生、無理ですか？」

「目標は確かに高い方がいいけど……でももうそろそろ、志望校はちゃんと決めないといけないし……」

「じゃあ志望校は相南にします。俺は『やればできる子』なんですよ？先生」

中三を受け持つのが初めての、まだ若い担任は、困ったような顔で笑った。

高校なんてどこでもいいって、今でもやっぱり思ってる。

だけどちよつとだけ、自分の意思つてものを宣言してみたかった。それと勇哉が言っていた「トモも、出来の悪い息子じゃない」っ

て言葉が、本当かどうか確かめてみたかっただけ。学歴なんかで、出来が良いとか悪いとか、決まるわけないってわかつているけど。

学校の教室は、相変わらず居心地が悪かった。

合唱コンクールの打ち上げに、クラスで僕だけ誘ってもらえないとか、教室で配られるプリントが、さりげなく僕だけ回ってこないとか……これって世間で言う「イジメ」ってやつなんじゃないかって思う。

僕が自殺でもする時は、お前ら全員の名前遺書に書いてやるからな、なんて死ぬ気もないのに考えてみる。

教室では「全然気にしてない」って態度をとりながら。

ああ、こんなところが美優の言う「トモのム力つくところ」なのかもしれないな。

休み時間も放課後も、土曜日も日曜日も、やることがないから勉強した。

だから幸か不幸か、塾の無料体験で受けた模擬テストでは、人生で最高にいい点を取った。

このままいくとマジで相南行けちゃうかもなんて思い始めた頃、僕はいつもの踏切で、久しぶりにあの人に会った。

「よっ、元気？」

小春さんに会うのは、あのバッティングセンターに行った日以来だ。

あれから小春さんは家に遊びに来なくなったから。

「元気ですよ。俺は」

「うん。よしよし」

小春さんはにこにこ笑いながら、僕の頭をくしゃっとなでる。
子供扱い……なんかすごくムカつくんだけど。」

「なんで最近、うちに来ないの？」

小春さんは自転車に乗っていて、スーパーかどこかの帰りみたいだった。

「宏哉とケンカでもした？」

「してないよあ？」

マフラーをずらして口元を見せて、小春さんは白い息を吐く。

「じゃあ、どうして？」

小春さんは何も答えなかったけど、その微妙な表情から「あれのせいなのかな」って思った。

子供が産めない小春さん。

子供なんて、いないならいなくてもいいじゃないかって思うけど、きつとそんな簡単なことではないんだろう。

結婚する前から、孫の話なんかしちやってる母さん。

保育園の子供の声を聞いて、泣いたって言う小春さん。

僕は大人の気持ちも、女の人の気持ちも、なにひとつわからない。

「あそこ、行きませんか？」

「え？」

「スカツとするとこ」

一瞬きょとんとした小春さんが、ぷつと吹き出すように笑った。

「迷惑なんですよ？」

「あれはウソ」

そう。迷惑なんかじゃ全然なかった。

小春さんが、元氣のない僕を心配して誘ってくれたって、本当はちゃんとわかってた。

それなのにすねたような態度をとった僕は、どうしようもないコドモだった。

「俺、おごりますよ?」

「お母さんからお小遣いもらってるような子に、おごってもらってるんでません」

そんなことを言いながらおかしそくに笑っている小春さんのことを、僕はなんとなく可愛いつて思う。

十歳も年上なのに。

お姉さんみたいな、先生みたいな、でも友達みたいな不思議な人。小春さんと並んで歩いていると、憂鬱な気分が消えていった。

美優が突然僕の家にやってきたのは、今にも雪でも降りそうな、どんよりとした休日の朝だった。

「付き合ってるのっ？」

半分寝ぼけていた僕に、美優は意味のわからない言葉を投げかけた。

「誰なのよ、あの女の人！ 付き合ってるのっ？」

「……あの女の人って？」

「バツティングセンターで一緒にいた人！」

小春さん？ 僕が小春さんといるところ、美優に見られた？

「あの人は……俺の兄さんの彼女だけど？」

「はあ？ お兄さんの彼女と、なんでトモと一緒にいるのよっ！」

なんだか僕は、さっきから文句を言われてるようだけど、どうして美優に文句を言われなくちゃならないのか、意味がわからない。

「あの、さ。俺が誰と一緒にいても、美優にはカンケーないと思うけど？」

僕の言葉に美優の頬が赤く染まる。

あれ？ なんで？ どうして？

「だって……俺たち、もうとっくに別れたじゃん？」

美優はさらに耳まで真っ赤にしている。

「しかも美優は、啓介と付き合ってるんだし」

「もう別れたもん！」

そう言いながら僕を見る美優の目は、なぜだかじんわりと潤んでいた。

「もう別れたの！」

「……なんで？」

「なんでって……だって……美優はまだトモのこと、好きだから！」

それは絶対ありえないはずの告白だった。

今年初めての雪が、かすかにちらつき始めた空の下、僕は美優と公園のベンチに座っていた。

だけど美優はしおらしくうつむいたまま、なんにもしゃべろうとはしない。

このままここにいても寒いだけだし……一体どうしたらいいんだよって思った時、美優がぼつりと口を開いた。

「トモに……気にして欲しかったの」

美優がしゃべってくれたことに、僕はとりあえずほっとする。

「啓介と付き合えば、トモが美優のこと気にしてくれるんじゃないかって……そう思ってた……」

それが啓介と付き合った理由？

「ねえ……美優とトモ……もう一度付き合うのって無理？」

無理だろ？ そんなの。

僕は確かに美優を傷つけたかもしれないけど、僕だってもう十分傷つけられてるんだ。

「ねえ、トモ……なんとか言っちゃってよ」

「……無理だよ」

「やっぱり美優のことは好きじゃない？ キスしたときも、抱き合ったときも、全然美優のことは好きじゃなかった？」

「それは……」

全然好きじゃなかったわけはない。

今だって、美優は他の女の子より可愛いと思うし、全然好きじゃない子とキスなんかしない。

「美優バカだからさ、今ごろになってやっとわかったの。美優はすつごく、トモのこと好きだって」

美優の声が徐々にかすれる。

「トモに会えないと会いたいって思うし、トモが他の女の人といるとこ見たら、もうどうしたらいいかわかんなくなっちゃって……」

そう言いながら美優が泣いた。ぼろぼろ涙と鼻水をたらして、僕の隣で哀しそうに泣いた。

このまま美優の肩を抱き寄せたら、何もかもがうまくいくんじゃないだろうか？

美優はまた僕と付き合って、クラスのみんなはあきれたように笑って、啓介は怒るかもしれないけど、それもなんとかなっちゃって……何もかも都合よく、変わるんじゃないだろうか？

だけど——そんなことをしても、僕はきつと後悔する。

「ごめん……美優」

僕の声に美優が顔を上げる。

「やっぱり……美優とは、付き合えない」

人を好きになるって、どういうことなんだろう。

僕は美優と会えなくなっても平気だったし、美優が啓介といた時は、なんでだよって思ったけど、どうしたらいいかわかんなくなっちゃうなんて気持ちはなかった。

僕は美優が僕を想うほど、美優のことを好きじゃない。

それより僕は、誰かを本気で好きになったことさえないんだ。

力が抜けたようにうつむいて歩く、美優の背中を見送った。

白くて冷たい雪が舞う中、僕はいつもの踏切を渡る。

僕が渡り終わると同時に鳴りだす警報機。

その音は今日も寂しく、くすんだ色の空に吸い込まれていくようだった。

家に帰ると玄関に宏哉の革靴が脱いであった。

こんな時間にめずらしいな、なんて思いながら部屋に上がると、リビングから言い争うような声が聞こえてきた。

「どうしてそれが母さんのせいだつて言うの？」

「母さんが余計なことを言うから、小春が来れなくなつたんだろ？」

「余計なことじゃないでしょ、大切なことよ！ あんたが言えないから、母さんが代わりに言つてやつたんじゃない」

「だからそれが余計なことだつて言うんだよ！」

リビングで言い合っているのは、母さんと宏哉だった。

宏哉のこんなに大きな声を聞いたのは初めてで、だから僕はちよつとビビった。

「宏哉。あんた何にもわかつてないのね？ あんたは一生自分の子供を抱けなくてもいいの？」

ああ……やっぱりそのことか。

僕が帰ってきたことに気づいた母さんは、一瞬言葉を切ったけど、すぐにまた口を開いた。

「母さんはね、あんたに普通の結婚をしてもらつて、普通の家庭を作つて欲しいのよ」

「子供がいないと普通じゃないのか？ 僕は母さんの言う『普通の家庭』だけが、幸せとは思えない」

「じゃあ母さんが間違つてると言うの？ 孫を抱けないなんて、私は絶対嫌ですからね！」

「孫だつたら……勇哉の子供がいるだろ？」

宏哉の声に母さんの顔色が変わる。

「勇哉の子供がいるからいいじゃないか」

「宏哉……」

「僕も僕の生きたいように生きるよ」

母さんに背中を向けた宏哉が僕の隣で立ち止まる。そしていつもの穏やかな表情で、少し笑ってこう言った。

「ずいぶん遅い反抗期だろ？」

それだけ言って宏哉が出て行く。残された母さんは、崩れるようにその場に座り込んだ。

「どうして……どうして宏哉まで……どうしてみんな出て行っちゃうの？」

母さんの背中中は情けないほど小さく見えた。自分の母親をこうやって見下ろしているのは、なんだかとても変な気持ちだった。

「母さん……まだ俺がいるから」

消えそうな声でつぶやいてみる。

「母さんが望むなら、俺、絶対相南行くし、それから東大行って、宏哉よりもっといい会社入って、超美人な人と結婚して、子供五人ぐらい作って、そんで……」

そのあとは言葉にならなかった。何を言っているのか、自分でもわけがわからない。

「トモ……」

今にも泣き出しそうな顔をして、母さんが僕を見る。

ああ、そうか……僕はずっと、母さんにこうやって見て欲しかったんだ。

僕はここにいるよ、いつだってここにいるんだって、気づいて欲しかったんだ。

「バカね……あんたが東大なんか行けるわけないでしょ」

母さんが鼻をすすりながら、そう言って笑う。

「それに、母さんのために勉強してどうするのよ」

それもそうだ。僕は宏哉に負けなくらいマザコンだ。

「ほんとに……トモはバカなんだから」
「だけどこの日、僕は初めて、母親に自分の気持ちを伝えられた気がする。」

今までもろくに勉強してなかったくせに、トップ校なんかを狙ってる無謀な僕は、すでに担任教師から見放されていた。

きつと啓介や他のやつらは、僕の頭がおかしくなったとでも思ってるだろう。

体験授業を受けた塾には同じクラスのやつらがいて、やっぱり居心地が悪かったから、塾へは入らなかった。

だから僕はクリスマスも正月も、家にこもって勉強した。

絶対無理だと決めつけてる担任を見返してやりたかったし、塾に行ってるやつらに負けるのもシヤクだったから。

そしていつの間にか僕は、自分がものすごく「頑張ってる」ことに気づいてしまった。

ありえない。あんなにカッコ悪いと思ってた「頑張る」ってこと。僕は今、必死にやってる。

「あんたね、そこまで言うなら絶対やり遂げなさいよ」

そんな僕に向かって母さんが言う。

「一生に一度くらい死ぬ気で勉強すれば、あんただってなんとかするわよ」

励まされてるのか、バカにされてるのかわからないけど、母さんは朝から晩まで口を出す。

放任主義から一転、どうやらこんな僕にも期待をかけ始めたのかもしれない。

ああ、でも、こんなことなら、ほっとかれたほうが良かったですかも。

勇哉の言うとおり、あの頃の僕は「恵まれてた」のだ。

ウザい母親の話が長引きそうだったので、僕は逃げるように外へ

出た。

コンビニでも行こうと、たいしてあてもなく歩き始める。
真冬の冷たい空気が、あっという間に僕の体を冷たく冷やす。

いつもの踏切で立ち止まった。

勇哉はあれから音沙汰なしだし、宏哉もどこに行ったのかわからない。

そして……小春さんにも、もうずっと会ってなかった。

どうしてるのかな。宏哉と一緒に暮らしてるのかな。

初めて会った時みたいに、踏切の向こうに現れないかな。

よっ、元気って、いきなり僕の肩を叩いてくれないかな。

遮断機が下りて警報機が鳴りだした。

目の前を通り過ぎる電車を見送りながら、僕はぼんやりと考える。

会いたい。会いたい。あの人に会いたい。

警報機の音が止み、僕の周りが動き出す。

人が車が自転車が、僕を残したまま動き出す。

だけど僕は、その場に立ち尽くしたまま動けなかった。

だって……だって気づいてしまったから。

いつの間にか、兄さんの恋人を好きになってしまった、この気持ちに……。

年が明けたある日、僕が勉強をしていたら、勇哉がひょっこり顔を出した。

勇哉の赤くて長かった髪は、いつの間にか黒く短くなっていた。

「よう、トモ。元気にやってるか？」

「勇哉っ！ 帰ってきたの？」

「いや、ちよつと荷物を取りに来ただけ」

勇哉は僕の前でいたずらっ子のように笑う。

「そう言えば宏哉も家出たらしいな」

「うん……でも、なんで知ってるの？」

「この前宏哉に会ったから」

「え……」

僕の胸がどくと動く。別に宏哉の名前に反応したわけじゃない。宏哉と一緒にいるはずの、小春さんのことを思い出してしまったから。

「彼女と……一緒に暮らしてるって？」

聞きたいような聞きたくないような気持ちで、僕は言う。しかし勇哉の口から出た返事は、意外なものだった。

「それが違うんだよ。小春とはもうずっと会ってないって言うんだ」

「……会ってない？」

「別れたのかな？ あんな美人、マジもったいねえ」

別れた？ 別れたのか？ほんとに？ どうして？

胸の中がざわざわして、どうしたらいいのかわからなくなる。

「トモ、なんかお前、ヘンじゃね？」

「べ、別に。いつもと同じだけど？」

「いや、絶対何か隠してる。おら、お兄ちゃんに言ってみなさい」

い、言ってしまいたい。けど絶対軽蔑される。いやそれより、笑い飛ばされるのがオチか。

だけどこんなこと、死んでも宏哉には相談できないし、相談するのならやっぱり経験豊富な勇哉だよな。

でも勇哉みたいなおしゃべり男に言ったら、宏哉に知られてしまうのは時間の問題……いやそれどころか、本人に知られたらヤバすぎだろ？

「なにウジウジ考えてんだよ？ まさか小春にでも惚れたか？」

「な、な、なに言って……そんなの、そんなのって、まさかありえないでしょ？」

「……トモ、お前って、わかりやすいやつだな」

勇哉はじつと僕の顔を観察した後、満足そうににやりと笑う。

バレた？ 勇哉に……僕が小春さんを好きなこと。

「バーカ。バレバレだったの」

勇哉は笑いながら、僕の額をぱちんと弾く。

「別にいんじゃない？ まだ結婚してるわけでもないんだし。まあ、あつちがな。お前みたいなガキ、相手にしてくれるかわかんねーけど」

「……いいんだよ」

僕の声に勇哉が顔を向ける。

「別に言うつつもりないし。俺は平和主義者だから」

「はんつ、つまんねー男。好きなら奪い取るくらいのこと、してみるっつーの」

もう一度僕の額をデコピンして、勇哉は階段をどこかと降りていく。

「あつ、えつと、勇哉は？」

階段の途中で振り向く勇哉。

「ほんとに結婚したの？ こ、子供は？」

「すべて順調。問題なし」

ピッと親指を立ててにやりと笑うと、勇哉は僕の前から去って行った。

放課後、職員室に呼び出された。

志望校に願書を出す直前、担任は模試の結果を見ながら、「もう一度よく考えて」と僕に言う。

だけど僕は「このまま行く」と答えた。

「失敗しても責任は持てないから」

「先生のせいにならないから安心して」

担任はあきらめたようなため息をつく。

どうしてだろうな……前の僕だったら、ここまでしないと思うのに。

もうめんどくさくなって、さっさとあきらめてたと思うのに。

夕陽の差し込む廊下に出たら、窓にもたれて美優が立っていた。

美優は僕の姿に気がつく、しゃきつと姿勢を正してぎこちなく笑う。

「どうしたの？」

「トモが職員室に入ると、見えたから」

あの初雪の日以来、美優は僕に話しかけてこなかった。

そして僕も、美優に話しかけることはなかった。

だから僕たちが話をするのは、本当に久しぶりのことだった。

「やっぱ相南受けるの？」

「受けるよ」

「自信あるんだ」

「ないけど、受ける」

僕の半歩後ろをついてきながら、美優がくすつと笑っている。

「トモのそういう言い方……」

「ム力つくだろ？」

「うん。けど、好き」

ちよつとあせつて周りを見回す。窓の外から運動部の掛け声が聞こえてくるだけで、廊下にいるのは僕たちだけだ。

「好きとか言われても……困るし」

「わかつてるよぉー」

美優はバグを抱きしめて、ぴょんぴょんと僕を追い越していく。

「じゃあっ！ またねっ」

うさぎみたいに揺れている美優の二つに結んだ髪を、僕はぼんやりと見送っていた。

そんな僕たちの姿を、誰かに見られていたって気づいたのは、翌日のことだった。

体育が終わって教室に戻ってきた瞬間、「やられた」って思った。僕のバグや机の中が荒らされていて、教科書に小学生レベルの落書きがされていた。

『バカ』『死ね』『好きとか言われていい気になるな』

チャイムの音が鳴り、教室内に誰かの笑い声が響く。

その瞬間、僕の中でずっと張りつめていた細い糸が、ぷちっとな音を立てて切れた気がした。

「これ書いたの、お前だろ！」

啓介の前に教科書を叩きつけたら、啓介は目を丸くして僕を見た。

「消せよ！」

「お、俺じゃない」

「これは絶対お前の字だ！ 消せ！」

今まで何をされても無視してきた。

もとはと言えば、僕が美優にひどいことをしたからだとわかって

いたから。

「な、なんだよ……俺はトモの、そういう上から目線なところが嫌いなんだよっ」

突然キレた僕と、それにビビっている啓介のことを、クラスの誰もが注目している。

見世物じゃないんだぞ、こっち見るな。

「なんにも頑張つてないくせに、美優に好きとか言われて……気分いいだろ？」

「お前……」

「トモは考えたことないんだ。美優の気持ちも、俺の気持ちも……なんの努力もしないで、好きって言われるの待ってるだけで……そういうのすごい頭くる」

手を伸ばして啓介の襟元をつかんだ。キャーって女子の悲鳴が聞こえて、それと同時に机の間に倒れ込む。

「な……殴るのかよ？」

僕に押し倒された啓介が、泣きそうな顔をしている。僕は握りしめた右手を、そのまま床に叩きつけた。

「トモ？」

泣き出したのは僕のほうだった。床に顔を押し付けて、子供みたいに泣いていた。

「トモ……だ、大丈夫か？」

啓介の情けない声が聞こえる。僕の名前を呼ぶ美優の声も聞こえる。

顔を上げられなかったのは、啓介の言った通りだからだ。

僕はなんの努力もしないで、好きって気持ちを伝えようとしてもしないで……そのくせあの二人が別れるのを願ってる。

つまんねー男……そんな勇哉の声が、どこからか聞こえてくるようだった。

その日以来、クラスの雰囲気がちよっとだけ変わった。

取り乱したように泣き出した僕を見て、何人かのクラスメイトは同情したのか、たまに僕に話しかけてくるようになった。

反対に完全に引いてしまったヤツもいるけど。

そして啓介は何か言いたげに、僕のことをいつもちらちら見てるくせに、何も言っていない。

だけでもう、どうでもいいんだ。

もうすぐ受験で、それが終わったら卒業で、僕たちはこの学校からいなくなる。

受験を間近に控えた放課後、校舎を出たところで偶然美優に会った。

いや、美優はきっと、僕のことを待ってたんだと思うけど。

「……ごめんね？ トモ……いろいろと」

美優は僕の隣で、ぽつりぽつりと口を開く。

「なんで……美優が謝るんだよ」

「美優ね、啓介にも謝った。美優も啓介の気持ちなんか考えてなかった」

美優の声を聞きながら、校庭に並ぶ桜の木を眺める。

あの桜が満開になる頃、僕はもうこの場所にはいない。

美優となんとなく並んで校門を出た。

その時、僕は見たんだ。

校門に寄りかかるようにして、誰かを待ってるようなその人の姿を。

「トモ……あのね？」

美優はなにも気づかないまま、僕に話しかけてくる。

僕もそれに合わせながら、ぎこちなく校門を通り過ぎる。

心臓がドキドキした。美優の声がだんだん遠くに消えていく。

息もできないほど、どうしようもない気持ちになった時、僕は立ち止って美優に言った。

「ごめん。忘れ物した。学校戻る」

「え？」

「ごめん！ 美優」

そのあとはもう振り向かなかった。

前だけを見て、息がきれるほど全速力で走る。

数人の生徒とすれ違いながら校門まで戻ったら、さっきと同じ場所ですぐ小春さんが微笑んだ。

「トモくん。彼女置いてきちゃダメじゃない」

「彼女じゃないです」

小春さんは笑みを浮かべたまま僕を見て、校庭の中へ入っていく。

「部外者は立ち入り禁止だよ」

「部外者じゃないもの。卒業生よ」

「えっ」

「言わなかったっけ？」

仕事を辞めた小春さんは今実家に住んでいて、その実家は僕のうちのそばで、だったらこの学校の卒業生でもおかしくないか。

「てことは、宏哉とその頃から一緒だった？」

「うーん、付き合いではいなかったけどね。今思えば、お互いなんとなく意識してたかも」

そんなに長い付き合いだったんだ……この二人は。

「あたしが十五の時、トモくんは幼稚園生ね」

「はあ……」

「下手すると、あたしがおむつ替えてたってわけか」

「それ言うの、やめてください」

実際、僕は宏哉におむつを替えてもらってたんだから。

小春さんは校庭の隅に立ち、桜の木を見上げる。

「この桜が満開になると、とってもステキなのよねえ」
のん気にそんなことを言いながら……。

突然僕の前に現れて、突然いなくなってしまう、十歳年上の兄さんの彼女。

僕はどうしてこんな人を、好きになってしまったんだろう。

「何しに来たんですか？」

冷たい風に吹かれながら、うねるような桜の木を見上げている小春さんに言う。

「まさか、俺に会いに来たわけじゃないよね？」

「……どうかな？」

そんなこと言いながら、意味ありげに微笑むのはやめて欲しい。

僕はまだ、本気が冗談かの区別もつかずに、勝手に舞い上がってしまうようなコドモなんだから。

「宏哉と……ケンカしたの？」

小春さんはその質問には答えない。

「うちに来なくなったのは、母さんのせい？」

「違うわよ」

やっと振り向いて、小春さんは僕を見る。

「お母さんの気持ちは、すぐわかるの。大切に育てた息子を、子供を産めないような女と結婚させたくないって気持ち」

「それは……」

「あたしがね、病気でこんな体になった時、周りの人たちはみんな『あなたは悪くない』って言うてくれた」

ふつと微笑む小春さんの髪が、夕暮れの風に揺れている。

「もちろんヒロもそう言うてくれた。こんなあたしとでも結婚してくれるって……でもね……でも、あたしがダメなの」

「ダメって？」

「あたし妊娠したことあるのよ。高校生の時」

ざわざわと心臓が騒ぎ始める。

だけど小春さんは、そんな僕にはお構いなしに、ひとり言のように話し続ける。

「相手は、なんとなく付き合ってた同級生の男の子。あたしが『子供できたみたい』って言ったら、ビビって逃げてった。だからあたしは親と一緒に病院行つて、子供をおろしたの」

なんて言ったらいいのかわからなくて、ただ黙り込むだけの僕。

「でもその時のあたしはね、逃げてった彼のことを恨むくらいで…

…お腹の赤ちゃんのことなんか、ちつとも考えてなかった」

誰もいない校庭にチャイムの音が響き渡る。

もう聞き飽きたその音が——どうしてだろう……耳に寂しく残る。

「罰が当たったのよ」

小春さんがつぶやく。

「何年か後に、子宮を取らなきゃ命に係わるって言われた時、あたしはそう思ったの。自分の子供を平気で殺したあたしに、罰が当たったんだ。あたしが二度と子供を産めなくなったのは、あたしのせいだって」

「……違う。小春さんのせいじゃない」

振り絞るように声を出す。だけと思いつく言葉はありきたりの言葉ばかりで、そんな自分が情けなくて嫌になる。

「トモくんも、そう言ってくれるのね」

小春さんは、そんな僕の前で静かに微笑む。

「でも……あたしみたいな女と結婚しても、ヒロは幸せになれないから」

「それも……違うと思う」

小春さんの視線が僕に移る。

「宏哉は口ベタで、ちよつと情けなくて……だけどほんととすごく優しくて、絶対にウソをついたりしないから……だから本当に、本心から、小春さんと結婚したいんだと思う」

僕は真つすぐ、小春さんの目を見て言った。

「宏哉は幸せになんかなれないよ。他の人と結婚したって……小春さんとじゃなくちゃ、絶対幸せになれない」

小春さんの目がみるみる赤くなって、ぱつと顔を隠すように後ろを向いた。

背中をかすかに震わせている小春さんは、泣いていた。

僕は何を言ってるんだろう。

あの二人が別れることを望んでいたはずなのに……なんで僕は、宏哉の肩を持つようなことを言ってるんだろう。

「……ごめん。あたしまた、トモくんの前で泣いてる」

「別にいいよ。でも今度泣くときは、宏哉の前で泣きなよ？」

僕の前でなんか泣かないで、宏哉の前で思いっきり……。

「そうね……そうする」

春を待つ、桜の木の下で振り返った小春さんは、涙でぐしゃぐしゃの顔で僕に笑った。

「それじゃあ」

「うん。またね」

踏切のところで小春さんと別れた。

ぼうつと突っ立っている僕に背中を向けて、小春さんは振り向かずに歩いていく。

もう……これでおしまいなんだ。僕の恋はこれでおしまい。

結局「好き」って伝えられないまま……。

遮断機が下りて警報機が鳴る。

うつむいた僕の前で、上り電車と下り電車がすれ違う。

「宏哉のバカやろう……」

好きな人が幸せになってくれればそれでいい……なんてカッコイイこと、今の僕には考えられない。

「小春のバカやろうっ。二度と俺の前に現れんなっ！」

半べそかきながら、電車の音にまぎれて叫んでみた。

そしたら、ほんのちよつとだけ心が軽くなつて……またあのチヨコレートケーキが食べたいなあ、なんて思ってる僕は、やっぱり単純だ。

明日が第一志望校の受験だという夜、宏哉と小春さんはそろって我が家にやってきた。

二人とうちの両親は、リビングに二時間以上もこもって、なにやら話し合いをしていた。

時々母さんのヒステリックな声や泣き声が聞こえ、僕は勉強も手につかず、ひやひやした。

そして話し合いが終わった頃、僕が下に降りて行ったら、玄関でばったり小春さんに会った。

「あ、トモくん。明日受験なのに、お騒がせしちゃったね？」

小春さんはやけに晴れ晴れとした表情をしている。

すると後ろから宏哉がやってきて、やっぱり爽やかな顔つきで僕に言った。

「ああ、トモ。僕たち結婚することになったから」

「結婚……」

わかっていたけど、ストレートにその言葉を投げつけられ、僕は軽く倒れそうになった。

「そ、そう……あの母さんを説得したんだ」

「というか、最後は父さんの『鶴の一声』」

「父さんの？」

「『俺はふたりを祝福する』ってな」

あの無口な父さんがそんなことを？

「なあトモ？ ああ見えても、この家で一番まともなのは父さんだから。お前も何かあったら、父さんに相談するといいよ」

「うん……」

「それと」

宏哉は兄さんらしく、僕の肩をぽんつと叩いて言う。

「あんな母さんだけど、根は悪い人じゃないから……わかってる？」

「……うん」

「だからこれからは、お前が母さんを支えてやって欲しい」
支えてやるって……何言ってるんだよ、宏哉……。

「大阪に転勤が決まってるんだ。小春を連れて行くと思う」
「えっ」

「トモくん。しばらく会えなくなるね？」

僕をのぞきこむ、小春さんのちよつと切なげな顔。
やめてくれ。そんな目で見られたら……僕はきつと、また泣く……。

宏哉が「車出してくる」と言つて外へ出て行った。

玄関先に残された小春さんと僕。

「トモくん？」

僕はうつむいたまま、顔を上げることができない。

「この前は……ごめんね？」

小春さんの声が、僕の耳にじんわりと響く。

「なんで、あんな話、トモくんにしちゃったんだろう」

ちらつと小春さんの顔を見た。小春さんはどこか遠くを眺めているような目つきだ。

「なんで……だろうな」

そしてゆっくりと僕のことを見る。

僕の視線と小春さんの視線が、吸い付けられるように一瞬だけ重なった。

「さよなら。受験頑張つて」

「小春さんも……体、大事に」

小春さんが目を細めて、幸せそうに微笑む。

「今度会う時、あたしはトモくんの『お義姉さん^{ねえ}』ね」

そうか……そうなんだよな。僕は自分自身を納得させるように、

こくんとつながずく。

二人が籍を入れたのは、それから一週間後の話。

「トモっ！ 受験票は忘れず持った？ 胃薬は飲んだんでしょね？ あんたすぐお腹痛くなるんだから」

朝から母さんは、自分が受験するかのようには落ち着かない。

「ちゃんと持ったから大丈夫だよ。じゃあね」

「ちよつとトモ！ あんたなら絶対受かるからね！ 落ち着くのよ！」

落ち着くのはそつちだろう？ まったく……母親ってのは、ほんとに。

そう思いながら靴を履いていると、家の電話が鳴った。

「はい。えっ、勇哉？ あんたねえ、全然連絡もよこさないで……え、今朝？ ちよつと勇哉、何言って……」

電話口で騒いでいる母さん。こんな朝にもめごとは勘弁してよ？ 「どうしたの？」

電話を置いて、呆然と突っ立っている母さんに聞く。

「赤ちゃん、産まれたって……今朝、三千五百グラムの……元気な男の子」

「え、マジで？」

「やだ、どうしよう。おむつ買わなくちゃ……ミルクと、あとベビ―ベッドも……」

「何言ってるの？ そんなもんいらないでしょ？」

「いるのよ！ 退院したらうちに同居するって！」

「はあ？」

「ちよつとちよつと！ お父さん！」

母さんはもう僕のことなんてどうでもいいように、父さんのもとへ駆けて行った。

マフラーを首にぐるつと巻いて、門を開けて庭から出る。

勇哉が奥さんと赤ちゃんを連れてうちに来るって……また面倒な
ことにならなきゃいいけど。

そんなことを考えながら歩き出したら、寒そうに白い息を吐きな
がら立っている、美優の姿が見えた。

「美優？」

「あ、おはよ。トモ」

美優がちよつとはにかんだように笑う。

「頑張ろうね。試験」

「待ってたの？」

「ね、途中まで一緒に行っていていい？」

美優は遠慮がちに隣に並んで、僕の顔をちらつと見上げる。

この角度から見る美優の顔が、一番可愛いつてこと、僕以外の男
はたぶん知らない。

「トモと一緒に行けたら、美優、すっごく頑張れそうな気がする」

「気のせいだよ」

「うっん、絶対」

美優のかすかに震える指先が、僕の親指をきゅつと握る。

「……………いい？ このくらいなら」

「ん……………いい、けど」

美優があんまり嬉しそうに笑うから、僕は思わずその手を握りし
めた。

「いいよな……………今日くらい」

「……………うん。今日だけ……………ね」

僕たちは恋人同士でもなんでもない。

失恋して、なんとなく人恋しくなつて、だからってまた美優に流
されるなんて、絶対ダメだと思う。

だけど……………こうやって美優と歩いていると、なぜかすごく落ち着
いた。

美優の手はともあつたかくて、精神安定剤より効き目があった。

「ちょっとお、七海さん！ 海斗くん、うちみたいよー」

受験が終わって一週間後。勇哉は奥さんと生まれたばかりの子供を連れて、うちに帰ってきた。

「あ、お義母さん。おむつ替えてもらえますうー？」

「あらやだ。おむつきれてるわ。ねえ、トモ！ カイクンのおむつ買ってきてくれない？」

リビングのソファで寝ころんでたら、母さんが僕を名指しした。

「トモくん、ごめんねー？ ついでにミルクもお願いしまあーす！」

「は？ 俺が？」

「あんた受験終わってヒマなんだから、ほら、さっさと動きなさいよ！」

僕は母さんに背中を押されて、しぶしぶドラッグストアに向かう。

見た目ギャル系の勇哉の奥さん、七海さんが初めてうちに来た時、母さんは声も出ないほど驚いていた。

だけどやっぱり孫は可愛いらしく、いつの間にか二人は意気投合しちやって、今では本物の親子のように仲良くやってる。

父さんは相変わらず無口だけど、たまにこっそり海斗を抱っこして、顔を緩ませているのを見たことある。

だけど僕にとって、非常に戸惑うことがひとつ。

それは、母さんと一緒に僕をパシリのように使っている、七海さんの年齢。

彼女は……僕とひとつしか変わらない十六歳なのだ。

「おっ、トモ。買い物か？」

おむつパックとデカイミルク缶をぶら下げて歩いていたら、仕事帰りの勇哉に会った。

勇哉はいつのまにか就職先を決め、ちゃんと真面目に働いていた。守るものができると男は変わるんだ、なんて、いかにもつばいセリフを僕に言ってたけど。

「あんたの息子のおむつと食糧だよ」

「それはそれはご苦労」

勇哉は荷物を持ってくれるわけでもなく、他人事のような顔つきで歩いている。

この兄貴を少しでも尊敬したってこと、もう絶対言っちゃらない。

「あ、トモ。ひとつ言っとくけどな」

僕に振り返って勇哉が言う。

「七海には惚れるなよ？」

「誰が惚れるか！」

「あの家に同居するのって、それだけが心配なんだよな。なんとつてお前には前科があるし」

「なんにもしてないって」

「してないじゃなくて、ビビッてできなかったんだろ？」

勇哉が軽く笑って空を見上げる。僕も何気なく空を見たら、白い飛行機雲が左から右へ、すうっと伸びて行った。

「そつえば今日だっけ？ 宏哉たちが行っちゃうの」

「……うん」

「そつか。ま、これでよかったんだよな？」

意味ありげな表情で、勇哉が僕の顔をのぞきこむ。

「これで……いいんだよ」

空を見上げたまま僕が答える。

「また新しい彼女でも作れよ。七海の友達、紹介してやろうか？」

「遠慮しとく」

七海さんの友達が僕のタイプじゃないってこと、見なくてもだいわかる。悪いけど。

遠くに響く踏切の音。

この音を聞きたび、小春さんのことを思い出すのかな。
それともすぐに好きな子とかできちゃって、小春さんのことなん
か忘れちゃうのかな。

いや、忘れられないか。今度会う時、あの人はもう家族なんだ。

勇哉が煙草に火をつけて、ゆっくりと息を吐き出す。

その白い煙の行方を追いながら、僕はぼんやりと考える。

だけど、きつと……あんな恋はもうできない。

あんなふうに人を好きになることなんか、もうできない……十五
歳の僕は、確かにそう思っていた。

「いつてきまあす」

十八歳の僕は、毎日電車に乗って高校へ通う。

「あ、トモくん。悪いけど、帰りにカイのおむつ買ってきてくれない？」

「えー、また？」

玄関先でヒーローになりきって、僕の足に蹴りを入れ続けている海斗を振り払い、七海さんに言う。

「だってあたし、コレだもん」

七海さんは、まだ膨らんでもいないお腹をわざとらしくさする。

二人目の子供がお腹にできたって話は二日前に聞いたけど、それを武器にやたらと僕を使い回すのはやめて欲しい。

「トモ、買ってきてやりなさいよ。七ちゃんは今が一番大事な時なんだから」

母さんはこの嫁さんを、やたら甘やかしていると僕は思う。でもま

あ、うまくいつてるみたいだから、これでよしとするか。

「わかったよ。いつてきます」

「いつてらっしゃーい」

なんとなく釈然としないまま、ひとつ年上のお義姉さんと、三歳になる甥っ子に見送られて、僕は家を出た。

いつものように踏切を渡る。

毎日同じ顔ぶれが行き交う朝の風景。

ぎりぎり引つかかるように受かった第一志望の高校は、入ってからがきつかった。

周りのレベルが高すぎて、授業について行くのがやっとという現実。

無理してこの学校に入ったことを恐ろしく後悔したけど、落ちこ

ばれるのはシャクだし、必死で勉強していたら、いつの間にか卒業の時期を迎えていた。

まあ、やっぱり僕は『やればできる子』だったと、昔の担任の言葉を思い出してみたり。

「トモ！」

中学校の校門前で美優に会う。

「あ、寝癖立ってる」

「時間なかったんだよ」

「今度あたしが髪切ってあげようか？」

「遠慮しとく」

「なによー、これでもあたし、美容師志望なんだからねー」

たわいもない話をしながら、僕は毎朝、美優と駅まで並んで歩く。別々の高校に通い始めてから、三年間ずっと。

帰りに待ち合わせして会うことも、日曜日にデートすることも、手をつなぐことも、もちろんキスすることもないけれど……。

「あたしこの前、啓介に会ったよ」

野球が強くて有名な、私立高校に通ってるはずの啓介とは、卒業以来会ってなかった。

「なんか超キレイな女の子と歩いてて、あたしに気づいたら『彼女なんだー』って、にやけながら教えてくれた」

「へえ……」

「トモに会ったら、よろしく言っというてだって」

なにがよろしくなんだか……。

「じゃあ今度また啓介に会ったら、俺からもよろしくって言うって」

「自分で言えはいいのに」

美優がくすくす笑っている。そして思い出したように、僕に振り向いて言った。

「そついえばさ、そろそろこつちに帰つてくるんだよね?」

「え、誰が?」

「トモの一番上のお兄さんと奥さん。キレイな人だったよねえ、お兄さんの奥さんも」

胸が少しドキドキするのは、美優が突然その話をふったから。

そつ自分に言い聞かせている僕の顔を、美優がいたずらっぽくのぞきこむ。

「トモさー、実はちよつと好きだったんじゃない?」

「だ、誰をだよ?」

「お兄さんの彼女」

「ま、まさか」

「トモつて絶対浮気できないタイプだね。嘘つくの超下手だもん。かわいいー」

何か言い返そうとしたけど、すべてお見通しのような顔をしてる美優の隣で、僕はあっさりあきらめる。

「でも今は違うから」

穏やかに微笑む美優を見ながら僕は思う。

ほんとにあれは恋だったのか……。

今になつてはそんなことさえ曖昧だ。僕はもう二度と、人を好きになれないとまで思っていたのに。

駅の建物が見えてきた。僕たちはその手前でいつも別れる。改札口で、美優の友達が待っているから。

そしてこうやって二人で歩くのも、あとわずかだ。

桜の花が開く頃、僕は東京の大学に、美優は地元の美容学校に進学する。

「美優……」

「ん？」

振り向いた美優の、茶色くて、ふんわりと柔らかかそうな髪が揺れる。

もう一度その髪に、触れてみたいと思ったりする。

「なんでもない」

「へんなの」

くすくすと笑う美優は、三年前と違っていた。

ぴょんぴょん跳ね回ってるイメージしかなかったのに、今では僕より大人びて見える。

僕のことを何でも知っていて、さりげなく気づかせてくれて、今一番そばにいる女の子。

そして僕はずいぶん前から気づいていた。

僕にとって美優は必要不可欠な存在だったこと。

美優は僕のことを、まだ好きでいてくれてるってこと。

だけどそれに気づいたからって、また前みたいに、軽い気持ちで付き合うのは嫌だった。

あの頃、もし美優に「子供ができたの」なんて言われてたら、僕は間違いなく逃げ出していただろう。

やりたいことやって、気持ちいい思いして、何の責任もとれないくせに……。

小春さんを捨てた男みたいに。

「じゃあね、トモ」

いつの間にか僕たちは駅の近くまで来ていた。

美優は僕に笑いかけ、いつものように小さく手を振る。

だけど僕はそんな美優の手を、引き寄せるようにつかんでいた。

「美優」

「な、なに？ どうしたの、トモ？」

あわてている美優の前で僕は言う。

「好き……なんだ」

「え？ 何が？」

「美優のこと」

見慣れた美優の顔が、みるみるうちに赤くなる。

「トモ」

「はい」

「遅いよ」

「ごめん……いろいろ考えてたから」

「考えてたって……何を？」

美優が怒ったように僕を見る。

「どうやったら大事にしてあげられるのかって……好きになった女の子のことを」

サラリーマンや学生が、僕たちの脇を足早に通り過ぎる。

そんないつもと同じ風景の中で、美優が僕の前で泣いていた。

「泣くなよ……こんなところで」

「うつつ、トモのバカあ……」

泣きながらグーで殴ってくるこの女の子を、僕はどうやって守ってあげられるだろう。

その答えは実はまだわかってないけど、とりあえず約束しよう。

「あのさ……今度、俺の髪の毛切ってよ」

「……あたしのカット代は高いよ？」

金取るのかよ、って心の中でツツコミながら、そつと美優の髪に
触れてみる。

ぎこちない動きでその髪をなでると、朝のラッシュの駅前で、僕
は美優に抱きしめられた。

夕暮れの帰り道。甥っ子のおむつとトイレットペーパーをぶら下げ踏切に立つ。

『ついでにトイレットペーパーも買ってきて！　お願い、トモくん』
ハートマーク付きのメールを義姉からもらい、文句も言わず買ってきてあげる僕。

目の前を快速電車が通り過ぎ、遮断機がゆっくりと上がった時、僕に手を振る小春さんの姿が見えた。

「久しぶり！　今、帰り？」

「ああ、うん」

何気なく、赤ちゃんの顔がプリントされたおむつを隠そうとする僕に、小春さんが微笑みかける。

「大きくなったのね、海斗くん。今度お兄ちゃんになるんだって？
今、ヒロと一緒にトモくんちで会ってきた」

「そう」

久しぶりに見る小春さんは、髪をばっさり短く切って、なんだかすごく元気そうだった。

「さっきこっちに帰ってきたばかりなのよ。ちょっとあたしの実家にも顔出しておこうかと思って」

「宏哉は？」

「お義母さんにつかまってる。後から来るって」

そう言って、いたずらっぽく笑う小春さんは、肩に見覚えのあるシヨールを羽織っていた。

「あ……それって」

「ああ、これ？　お義母さんがあたしのために編んでくれたのよ」

小春さんは嬉しそうに、僕の前でぐるりと回る。

ああ、そうか。そうだったのか。

珍しく母さんが、せつせと編み物なんかしてると思ったら、小春さんのために編んでいたのか。

どこから漂ってくる夕食の香り。空に響くチャイムの音。ふざけながら家に帰る小学生たち。

いつもと変わらない夕暮れのはずなのに、今日は空気があたたかい。

小春さんの肩に揺れる、桜色の毛糸のせいかな？

「送ってくよ」

「ええ？」

冗談でしよって顔で僕を見る小春さん。

「どうせ暇だし」

「じゃあ、ちよつと遠回りしちゃおうかな」

僕の手から荷物をひとつ取ってふふつと笑うと、小春さんはゆつくりと歩き出した。

今来た道を引き返すように、僕は小春さんと歩く。

今夜は宏哉と小春さんのために、母さんがご馳走を作って、一緒に食べることにしている。

だから小春さんには、あとでいくらでも会えるのに……なんとなく、今この道を、二人だけで歩きたい気分だった。

「トモくん、背、伸びた？」

「え、ああ、少し」

「おつきくなったのね」

「もう十八ですから」

僕の隣でくすくす笑っている小春さん。その表情を見るだけで、宏哉とはうまくやってるんだなあってわかる。

やがて僕たちの前に、中学校の校舎と、まだ咲いてない桜の木が見えてきた。

『この桜が満開になると、とってもステキなのよねえ』

ふと三年前を思い出す。

桜の木を見上げてそう言った、あの日の小春さんのことを……。

「実はけっこうへこんでたのよね」

ぽつりと小春さんがつぶやく。

「ほら、ここでトモくんと会った日」

「ああ……」

小春さんも思い出していた。僕と同じあの日のことを。

「平気な顔してたけど、かなり落ち込んだの。好きな人の子供も産んであげられないあたしなんて、生きてる意味あるのかな、とか

……」

小春さんは昔を懐かしむような顔つきで、そつと髪を耳にかける。

「でもトモくんのおかげでふつきれたんだ」

ゆつくりと僕に顔を向ける小春さん。

「俺は何もしてないよ」

「でも話を聞いてくれた」

「俺じゃなくてもよかったでしょ？」

「うつん、違うの」

僕たちの間に風が吹く。桜の枝が頭の上でかすかに揺れる。

「なんでトモくんにあんな話しちゃったんだろうつて……ずっと考えてたんだけど」

小春さんが僕の目を見て言う。

「あたしとトモくんって、なんとなく似てるのかもしれない。不器用なところとか」

「不器用なところ？」

「そう。本当は弱いくせに強がっちゃって、でもやっぱりうまくいなくて……いつも損しちゃってるような感じ？」

小春さんはいたずらっぽく僕に微笑む。

「でも、弱い自分も見せちゃっていいんだってわかった。トモくんの前で泣いたら、先が見えたの」

夕陽が、彼女の頬をほんのりと染めている。

「ありがとう。感謝してるよ？」

「だったら、俺も小春さんに感謝する」

「なんで？」

「小春さんのおかげで、本当の彼女ができたから」

えーって言って小春さんが笑った。

「あたし何もしてないわよ」

「してくれたよ」

小春さんと出会って、僕はいろんな気持ちを教えてもらった。

何かに向かって頑張る気持ち。人に優しくしてあげる気持ち。誰かを好きになる気持ち。

知らなかったら……きっとまだ僕は、誰かを傷つけながら、退屈な毎日を送っていたと思う。

「送ってもらっちゃって、ありがとね」

小春さんの実家の前で別れる。玄関の照明が灯り、小春さんを待っていた家族の足音がパタパタと聞こえる。

「宏哉の代わりだよ」

「ううん、トモくんはヒロの代わりじゃないよ？ トモくんはトモくんでしょ？」

桜の花が開くような小春さんの笑顔。

「じゃあお礼に、またチョコレートケーキ作って」

小春さんは持っていた荷物を僕の手に握らせ、にっこりと答える。
「了解！」

肩にかかった小春さんの桜色のショールが、ふわりと風に揺れた。

なんとなくいい気分で帰り道を歩く。

『トモくん、おむつまじー？』

ポケットで震えているケータイは、七海さんからのメール。

わかってる。今帰るよ。そうせかすなって。

茜色の空の下。おむつをぶら下げながら考える。

次に会う時、小春さんのことを「お義姉さん」って呼んでみようか……。

ちよつと、いや、かなり照れくさいけど。

手をつないだ親子連れとすれ違う。

お父さんとお母さんの手に、ぶら下がるようにして歩いている小さな男の子。

僕もいつか結婚して、家族を持つ日が来るのかなあ、なんて想いが一瞬頭をよぎる。

その時、僕の隣にいるのが、美優だったらいいなと思う。

踏切の前に立ち止り、そんなことを考えていたら、無性に美優に会いたくなった。

おむつとトイレットペーパーを左手に下げ、右手で美優にメールする。

『明日、うちに来て髪切つてよ。会いたいから』

上下に点滅する赤い光を見ると、すぐに返事が返って来た。

『うん、いいよ。あたしもトモに会いたい』

電車が僕の前を通り過ぎる。

その風を受けながら、ケータイをポケットに突っ込んで、夕焼け空を仰ぐ。

遮断機が上がると同時に駆け出した。

なんとなく過ごしていた毎日が、今、意味のある毎日に変わろうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9455w/>

桜色の明日

2011年11月17日15時32分発行